
最後のミステリー

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後のミステリー

【Nコード】

N2168R

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

ミステリー界のカリスマ作家の最後の作品は、永遠の未完の作品となった。謎の暗号を残して……。

ミステリー界のカリスマ、定石を守りかつ定石をひっくり返す奇想の作家と称された老ミステリー作家の遺稿がついに出版され、日本全国で話題を呼び、ベストセラーランキング一位の座を数週間守り続けていた。

これほど売れるのは、単に遺作だからというだけではない。まさに老作家の集大成であり、最後に生み出された奇蹟の作品だからだ。彼と長い間連れ添ってきた夫人が愛猫の尋常ではない鳴き声で異変を察し、部屋に飛び込んできた時にはすでに時遅し、彼の身体は冷たく冷え切っていたという。死因は心筋梗塞と発表され、葬儀は身内のみでひっそり行われた。彼の愛用していたパソコンはエディタソフトを立ち上げたままになっており、キーボードの横で、愛猫が悲しげに泣き続けていたと報道され、最後の最後まで彼が作家として生きてきたのだとファンは悲しみとともに、畏敬の念を持って泣いた。

さて、その肝心の作品の内容だが、これは名探偵が何十年にもわたる日本の歴史の暗部と、とある一族のどろどろとした因縁が引き起こした凄惨な連続殺人事件を解決していくという単なるミステリーにとどまらない骨太な物語であり、なおかつ表現に実験的な手法も散りばめられ、長年のファンや口うるさい評論家達をうならせる出来となっている。

探偵の見事な推理によっていったん事件が解決したと思わせて警察が犯人を逮捕してめでたしめでたしと思いきや、たった一つの証拠品からすべてが覆され、実は別に真犯人がいたというどんでん返しには誰もが驚嘆した。

その隠された真相は、この国の歴史の認識をひっくり返しかなしいと作中で探偵がほのめかしつつ、友人に対して手紙で真相を告白するのだが、その内容が暗号仕立てになっている。

問題は、その暗号部分が書かれたところで、老作家が天に召されてしまったことであつた。友人による解読シーンまでは書かれていないのだ。つまり、作中の人物ではなく読者自らその暗号を解読しないことには、真犯人が誰なのか分からない。

これはまさしくの未完の大作であつた。だが、暗号自体は完成しており、作中においても、探偵は「真相を解く鍵は今まで君に話してきた話の中にある。その鍵が何か分れば、これは暗号ではなく、ただの作文と化してしまう。それでも、これから暗号文で書かざるを得ない僕の気持ちを君なら察してくれると信じる」と手紙の冒頭で断りを入れている。難解ではあるが、必ず解ける暗号のはず、と遺稿を一読した編集者は確信した。

未完であるにも関わらずこの作品が出版されたのは、単に売れるからと判断されたからというだけではなく、誰かに小説内の謎を解いてもらいたいという編集者の意向も反映されているのだ。

このような数奇な事情により、このミステリーは世に出され、多くの人々がその暗号を説くべく睡眠時間を削ってむさぼり呼び、思わせぶりな台詞や表現を抜き出し、蛍光ペンでチェックを入れ、メモを取り、図表とした。

そして、各人がウェブサイトで熱く推理を披露し議論する。高校生、サラリーマン、警察官、科学者、あらゆるファンのほとばしる熱情もむなし、結局その暗号の解読の手がかりすら得られなかった。暗号解読の権威がコンピュータ解析にかけた結果、「今日の晩ご飯のレシピ」が出てきたという噂もあつたが、真偽は不明である。

それでも、ファン達は未だ睡眠時間を削り、暗号解読に取り組み続けている。

このように世間が大騒ぎしている一方で、夫をこよなく愛していたがその仕事についてはほとんど関わることなく、著作すら読まなかったという老婦人は、亡き夫の部屋をそのままに残し、今日も静かに彼との日々を偲んでいる。

老作家が可愛がっていた猫のタマは気持ちよさそうに彼女の膝の上で丸くなっていたが、不意に膝から飛び降りると、いつもと同じように一番のお気に入り場所へと駆けあがっていった。

その様子を夫人は目を細め、微笑みながら見守る。

今にも夫の声が聞こえてきそうな光景だった。

機械にうとい婦人にはよく理解できなかったが、夫はよくこんな風にタマをしっかりとつけていたものだ。

「こら！ 書いている時にキーボードの上に寝っ転がるな、出鱈目にキーを叩くな。訳の分からない文章を消す身にもなれ」

夫の最期を看取ったのも、このタマだった。きっと、最後の最後までこのようなやり取りをしていたに違いない。

そう思うと、彼女は少々タマに対して嫉妬を感じないでもない。

そして今日もタマはお気に入りキーボードの上でがちゃがちゃとデタラメにキーを打ってじゃれている。

(後書き)

猫がシエイクスピアの作品を書く可能性も0ではない。可能性だけなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2168r/>

最後のミステリー

2011年10月8日05時48分発行